

ブータンから※クスザンボー

— ブータン紀行 —

1991

※クスザンボー=こんにちは

(32代) 村山善文

(32代) 岡田克弘

体を水辺で自然乾燥させたあとシゲと飛ぶようにして後を追っかけた。おっかけているうちだか追いついてからだがよく思い出せないが、ある時を境に突然目の前の景色がわたしの心の中に大きな意志というか存在をもって現れてきた。ブータンにはどこにでもあるような樹やその下につづいている道がある安心感と共に輝きを放ち始めたように感じられるのである。それは、少年時代に川で遊び水疲れした気怠い体で風景を眺めていたあの頃感覚にも似ている。わたしはその心地好い既視感に包まれて歩いていた。樹、道、人、目に入るもの全てが生きている、生の力で満ち溢れている。なにもかもがいとおしくなりシャッターをただ切るという行為を繰り返した。こんな経験は最近忘れてしまっていたのかもしれない。

▷ ブータンへ

1991年6月2日、私達はブータンのパロ空港に降り立った。ブータンで唯一のこの空港は周囲を山に囲まれ、その山間を流れるパロ=チュの広い河原につくられている。

バンコクから約4時間。バンコクでの喧騒と厚さで少し疲れた体を、微風が戯れて気持ち良い。陽は既に傾いて昏彼時のやわらかな光に包まれたパロ谷は、やさしい表情で私達を出迎えてくれる。緊張感も疲労感も、おじき草の葉が閉じる様にして、ゆっくりと萎んでゆく。

空港の建物は驚く程小さく、8畳程の部屋が2つあるだけで、2階が管制塔であるらしい。入国者は私達他、ブータン人の家族連れと、商用であるらしいスーツ姿の日本人、白人旅行者の10名余りだ。

出入国カードを記入して、パスポートとビザ代の20ドルを支払う。ブータンの民族衣装のゴを着た審査官の目は、パスポートの写真と私の顔の間を何度か往復して、やがて貰いっぱいにビザスタンプが押された。

青いインクが少しにじんでしまっていて、少し不満ではあるけれども、これで正式にブータンに入国できるという喜びで、暫くビザを見つめてしまう。

その後、簡単な荷物検査を終えて外へ出ると、二人の男性が私達を出迎えてくれていた。明るい灰色のゴに真っ赤な野球帽（ブータンの着物は、日本のそれと全く同じと言って良い程似ている）といった出立ちのトレッキングガイドのニルミと、茶系のチェック地のゴを着た小柄なドライバー、チミである。

私達は、挨拶を交し、簡単な自己紹介をした。着ている物も日本と似ているし、顔立ちも日本人と似ているので、初対面でも不思議とごちなしさは感じない。これからの行程について簡単に打ち合わせをして、トヨタ製のワゴン車に乗り込む。ブータン初日の滞在地はティンブーである。一度諦めたブータン旅行はゆっくり走り出した。

私達がブータンに興味を持った最初の切っ掛けとなったのは、雑誌に載ってあったブータンヒマラヤの特集だった。

ヒマラヤの未踏峰に登頂しようという目的で、それまでインド北部のザンスカール地方に焦点をあわせていたが、今ひとつ地域的な魅力に欠けていて、果たして計画は白紙に戻った。

「もっと魅力的な所はないのか」そんな状況の中で、ブータンヒマラヤについての特集は私達にとって全くタイムリーな答えとなった。

7千メートル級の未踏峰が今なお数多く残され、その懐は豊かな自然に恵まれ、周辺諸国にはない独自の文化を守る人々が住むブータン。私達のイメージする桃源境がそこにある。ヒマラヤ、人々、文化、自然、あらゆるものが美しい魅力にあふれていた。

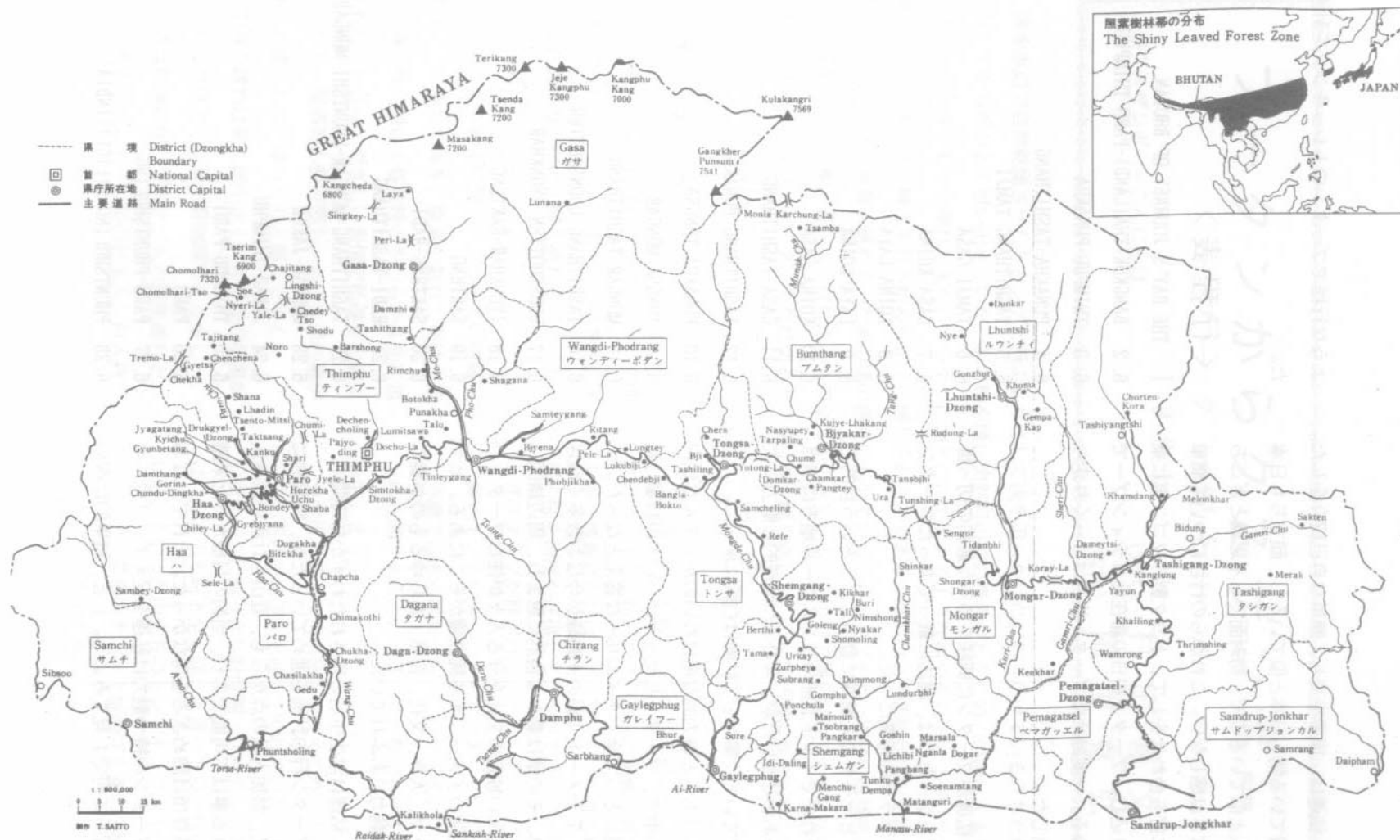
私達は学生生活の残されたわずかな時間で、ブータン行の計画を進めていったが、時間的に又、参加人数の点からも、登山を計画に組み入れる事は不可能であり、当初の目標だった未踏峰登頂は諦めざるを得なかった。それでもなお、ブータンの持つ魅力は私達を捉えて、「兎に角、行って何でも見てみよう。」と、結果的に次の

ような行程でブータンのトレッキングを計画した。

＜行程表＞

THE DAY'S JOURNEY OF BHUTAN

6. 2 BANGKOK (THAILAND)-PARO-THIMPHU
6. 3 THIMPHU-PUNAKHA
6. 4 PUNAKHA-TASHITHANG
6. 5 TASHITHANG-TAMJI
6. 6 TAMJI-GASA
6. 7 GASA-KOINA
6. 8 KOINA-LAYA
6. 9 LAYA-KOINA
6. 10 KOINA-GASA
6. 11 GASA-TASHITHANG
6. 12 TASHITHANG-PUNAKHA
6. 13 PUNAKHA-TONGSA
6. 14 TONGSA-MONGAR
6. 15 MONGAR-TASHITHANG
6. 16 TASHITHANG-UDONSHOTTEN
6. 17 UDONSHOTTEN-JYONKHAR
6. 18 JYONKHAR-SAKTENG
6. 19 SAKTENG
6. 20 SAKTENG-RADI
6. 21 RADI-TASHITHANG
6. 22 TASHITHANG-MONGAR-LHUNTSHI-MONGAR
6. 23 MONGAR-JAKAR
6. 24 JAKAR-THIMPHU
6. 25 THIMPHU-PARO
6. 26 PARO
6. 27 PARO-PHUNTSHOLING
6. 28 PHUNTSHOLING-SILIGLI (INDIA)



このような行程を立てた意図は、ブータンの東西南北を線としてではあるけれども、十字の形に結んで、出来るだけ幅広くブータンを見ようという考えからである。

ブータンは、九州くらいの小さな国だが、ヒマラヤの山腹にある為、南北の標高差は7千メートル程に及び、南は亜熱帯、中部は温帯、北部は高山帯と、実に豊かな植生が見られ、また、人々の生活形体も狩猟から稲作、そして移牧へと異なって行く。また東西においても、東部のブータン人はシャーチョップと呼ばれるのに対し、西部のブータン人はガロップスと呼ばれ、其の先祖を異としている。その為か、多少の文化的違いが見られる。こういった点から、ブータンを知るにはまず、幅広く歩いて見る必要がある。

また、私達がトレッキングで目指した、ブータン最北の村ラヤ、ブータン東部のサクテンには、それぞれ、ラヤップ、ダクパと呼ばれる少数民族が住んでいる。今回のブータン旅行の目的の半分は彼らに出会う為だと言っても良い。

一言で言えば、ブータンの東西南北の文化・自然の差異を通して、ブータンという国を見てみようという事が私達の主題であったが、正直に言えば、その主題も切っ掛けに過ぎず、自分達の好奇心を満足させるべく、まずは何も気負わずに見えるまま、聞こえるまま、感じるままにブータンの自然と人々に出会ってきた。

ブータントレック

▷異邦人として

ブータンをトレッキングしていて気が付く事

は、峠の全てにラマ教に関する示しがあるという事だ。それは白い布に教典を細かく書いたタルチョーであったり、小さな仏塔であったり、白い石を壁状に積みあげたところにいくつも取り付けられたマニ車の例であったりする。

村には、日本のお寺や西洋の教会などと同じ様にラマ教寺院があり、私達は至る所で宗教と対面する事になる。

ティンブーを後にした私達は、ワゴン車にトレッキングに必要な装備一式を積み込んでブータン中央部のプナカへ向う。

その途中、標高3,100メートルのドチュラ峠を越える。天気が良ければ、ブータンとマラヤの大パノラマが満喫できる所だ。生憎の曇天で、灰色の空が広がっているだけ。高さ15メートル程のタルチョーが何十本と風にはためいている。風にはためく度に、そこに書かれた教典が唱えられるのだという。峠を一気に下ると、標高480メートルのプナカだ。ブータンの中央部では最も標高の低い村である。その為、日本の梅雨の時のように蒸し蒸ししている。

幕営地はプナカの中心から少しはずれた村で、川の畔の牧草地にテントを張る。

ここで、私達の一行に更に2名仲間が加わった。ニルミと同じくトレッキングガイドのシゲと、私達の胃袋の世話をしてくれるコックのチャプチュだ。シゲは歌がとても得意で歩いている時も、休んでる時も自慢ののどで私達を楽しませてくれる。チャプチュは物静かなおじさんだが、いつも笑顔で何かと細かく世話をしてくれて、その料理の見事さに感心するばかりだ。

テントは2張り。初めは、一つは私達用で、

もう一つはガイド達を使うのかと思っていたが、夕食の時に、片方が食事をするテントでもう片方が寝る為のテントで、どちらも私達二人だけが使うものである事が分かった。

いくつかの籠に仕分けられた食糧や生活道具と、私達のザックは、途中の村から、馬が運んでくれるという。そんな至れり尽くせりのトレッキングにとまどいを感じてしまう。

翌日、次の村へ行く途中プナカゾンを見学する機会があった。ゾンとはブータン語で城の意味だが、以前は宗教と政治が一体となっていて、ゾンが信仰の場としての役割と、政治、軍事の役割の両方を兼ねていた。

プナカゾンは、かつてブータンでのラマ教の総本山で、ブータンの第1回目の国会が開かれた場所でもある。

一般の集落と川を隔てて、間に橋が架けてある。橋を渡って正門の前に立つと高さ20メートル程の立派な楼閣が正面にそびえ立ち、何人もの人夫が労朽化したその門の修理にあたっている。中には足かせをされた人達もみえる。罪を犯した人が労役を課せられたのだろうか。私の中のブータンのイメージに現実の世界が交錯して複雑な気持ちになる。

入り口の向こうでは、僧侶達の姿が見える。自分の意識の中で、自分が異教徒の存在である事が強く感じられ、寺院の中へ入る事が躊躇される。見えないカーテンで遮られた向こう側の世界は、ただ興味本位だけでは踏み込めない気配がある。

中に入る事を諦めて、寺院のまわりを散歩していると、岡田が二人の僧侶と話している。

私もその輪に加わり、僧侶の話に耳を傾ける。と言ってもブータン語は皆目見当がつかないので、僧侶が指差して「あれはゴラゴ、あれはゴモゴ」と言うのを友唱して相槌を打つ。

そんなやり取りをして、やがて私達は寺院の中へ通された。門をくぐった所の中庭に菩提樹が植えてある。ぐるりを囲む回廊の壁の所々にマンダラが描かれている。それらの一つ一つについて説明を受けるが、言葉が分からないのが残念だ。自分なりマンダラの意味するものを感じようとするが、壁に広がる宇宙に、想像は追いついてゆかない。具象化された宇宙の中に、人は意識を委ねて一体化し、宇宙を体験するのだろうか。

寺院の中を案内して頂いている間、違和感がつきまとい離れない。僧侶達は気さくで親切だけれど、かえって申し分けない気持ちになってゆく。異教徒である私達。彼らの聖域にズカズカと土足で入り込んでゆくと後ろめたい気持ちになる。

トレッキング中訪れた他の村々でも、私達はそれぞれの寺院の中に通して頂いた。普段は女性の話ばかりするニルミや、陽気なシゲが、仏像を拝む時は驚く程真剣な顔つきになる。直立の姿勢からうつ伏せになって五体を投げ出す動作を何度か繰り返す。なじみのある日本の仏像とよく似ているけれども、私も彼らの後について合掌する事ははばかれた。私達は異教徒なのである。

プナカゾンを去る際に、寺院の壁に向かって用を足す人夫を見た。静水に一石を投じたその光景に頬が緩んだ。

▷銀嶺と草原のラヤ

ブータンの少数民族ラヤップの村ラヤ。ラヤップの人々はヤクの移牧をその業とし暮らしている。顔立ちはパロやティンプーに住むブータン人と変わらないが、女性の出で立ちに特徴がある。ラヤップの女性は、ヤクの毛から編んだ黒色のチョッキ（コラ）と長い巻きスカート（ツイム）を着、頭にチョコンと竹で編んだとんがり帽（ペロ）を載せている。

ブータンヒマラヤの懷に抱かれた高原に住むラヤップの人々に会いたい為にティンプーから6日間の行程を要して、6月8日、ラヤへ辿り着いた。

ガサを出て、コイナという谷底の村で一泊。そこから更に切り立った深い谷に沿って徐々に高度をかせいでゆく。コイナを過ぎて暫くするとブータンの兵舎があり、兵士の姿はなかったが2人のブータン人女性が住んでいた。中国のチベット自治省の国境に近いのだという現実を見る。確かにラヤから国境までは、何日もかからないらしい。

この辺りから景色は変わり、鬱蒼とした森林から、木もまばらになって緑の原っぱには、黄色やピンクの小さな花がじゅうたんの様に咲き乱れている。高所らしい風景の中を更に登ってゆく。

途中、馬をおって村へと帰るラヤップの母娘と一緒にいる。写真で見たのと同じ出で立ちに、ラヤに來たんだという実感が湧いて来る。少女は威勢の良い掛け声で巧みに馬を追っている。生活の力強さがみなぎっている。

ラヤの集落は、標高3,800メートルでヒマ

ラヤの山腹がいったんその傾斜を緩めたわずかな平地にある。そこから下は、再び断がいとなって落ち込んでいる。谷をはさんで向かいには、穂高のような岩と雪の峰々が連なっている。そして、その谷の上には、カンチュダがその威容を現していた。

私達は村の中へ入ると、石造りの小屋へと案内された。ここはトレッカー用のものらしく、ベッドが備えてある。小屋の管理人らしい男が出迎えてくれていた。

この頃、ラヤの男性達はヤクと共に更に高所へ移っている様子で、村には女性の姿が目立つ。私達の居る所を避ける様にして、遠くを歩いてゆく。閑散とした雰囲気がおおさら辺境に居る事を感じさせる。

今にも雲に隠れようとするカンチュダの姿をカメラやビデオに収めていると、管理人の友人であるらしい男がやって來た。“ゴ”にロシア帽を被った姿に、ますます中国との国境に居る事を感じてしまう。彼は警察官で、ブータンの南部サムチの出身だが、今はラヤに赴任しているという。いわばいわば村の駐在さんだ。

彼は私達を大変歓迎してくれて、彼の家へ招待してくれた。泊まっている小屋から少し離れた所の彼の家は、木造の二階建てで、玄関から一歩中に入ると、手さぐりで進まないといけない程暗かった二階へ上がって、窓際の方へと通され腰を降ろした。

傍らにナショナル製のラジカセが置いてある。トレッキング中感じた事だが、ブータンの人々の日本の工業製品に対する感心は深い。ニコンやソニーやホンダ。それらの製品は一種のステ

イタスとされ、王様の乗っている車も三菱のパジェロだという。

こんな辺境に来て日本製品を見る事に驚きを感じざるを得ない。しかし、私達は、それらの工業製品フィルターを通してしか認識されていないのだろうか。彼らと私達のコミュニケーション中で、そういった事が媒体となっているのを感じる時、何とも言えない気持ちになる。

雑談をしながら、ブータンの地酒、チャンを御馳走になる。小麦を醸酵させて作ったらしく、もみ殻が浮いている。口あたりは酢っぱくて、そう何杯ものめない。ガサで飲んだのも地酒だったが、そちらは蒸留酒の“アラ”でアラの方が飲みやすかった。

彼は、母親と二人で暮していて、母親と私達にとヤクの肉を焼いてくれた。初めて食べるヤクの肉は黒っぽい色で、口に入れると堅くて一度ではなかなかかみ切れない。あめをなめる様にして、やわらかくしてからでないと日本人には食べられない。ビーフジャーキーの様でかむ程に味がしみ出る

他にも、バター茶なども頂いて、ただただその親切さに感動する。チャンにヤクの肉にバター茶、決して美味しいものではなかったけれど、かまどに薪をくべる母親の姿が暗い部屋の中で浮かび上がって美しかった。

ラヤでの晩さんは、女性達の踊りも加わって大変賑やかなものになった。

すっかり暗くなると小屋の外の広場にはたき火がたかれ、20名程の村人達が集まってきた。

とんがり帽のペロを被った女性達がたき火を囲んで踊り始めた。踊りもあり派手でなく内

や外をくるくる向きながら輪をすすめゆく。

初めのうちは怪しい雰囲気が漂っていたが、だんだんと興がのってきて、私達もペロを被って輪の中に加わった。歌好きのシゲも、美声を響かせて踊っている。単調だと思っていた振りも見よう見真似でしてみると結構難しい。そんなぎこちない姿がおかしらしく皆が笑っている。

宴たけなわてになる頃、おかしな事に気付く。男が男と手をとって、女は女と手を取って暗闇の中へ消えてゆく。こちらの思い過ごしかもしれないが、何となく見てみぬふりをしないといけな雰囲気がある。聞く事も出来ないので事実は分からない。

ブータンは性についてはオープンであるらしい。ニルミいわく、祭りになると、祭りもそちのけで男達はガールハントに精を出す。

それが祭りの最大の楽しみでもあるようだ。写真で見ただけでは宗教的な色彩の濃い祭りの舞台裏では、そういった事もあるんだ、と少し意外だったが、いづこも同じだ。こういうところにもブータンの長閑さ、おおらかさが表れている。ラヤの場合はどうだか分からないけれども。

踊りが終わって小屋に戻る時、シゲが女性達のひとりにお金を渡していた。「そういう事だったのか。」と了解して、舞台裏を見て少し興ざめした。彼女達は観光客の前では踊る事で現金収入を得ている。生活の為の当然な行為だ。私達は十分に楽ませてもらった。私達が思い描いていたのは、こっちの勝手な幻想で、それと違っていたからとすぐ様幻滅してしまうのはおかしいと気付く。私の見たものは、事実として

の現在のラヤの人々の生活手段であったのだから。

▷ラヤをとあとに

昨日、谷の奥に見えていたカンチュダも残念ながら雲の中だ。淡い雲が空を覆ってきている。モンスーンも近いのだろう。

ラヤの集落を後にし、近くの小高い丘に登る。緑を渡る風が気持ち良い。昨夜の舞踏の高揚が夢の中の事のように、見下ろす村では一日の生活が始まっている。私達が訪れる前から、そしてこれから今見ている生活が静かな力強さをもって営まれているのだろう。そんな事を思いながら、風に身を委ねている。美しく厳しい自然の中では、人も草も花もヤクもあらゆるものが等しく生きている。

二人の子供が近くで遊んでいる。6才くらいの女の子と、4才くらいの男の子。姉弟だろうか。私も仲間に入れてもらって、花輪をつくったり、私の持っていたボールペンとメモ用紙でらく書きなどして遊ぶ。言葉など勿論通じないので、笑顔だけが会話の手段だ。小さなかわいい花や、気持ちのよいそよ風をお互いに楽しいと感じて微笑みあう。男の子は私の姿が珍しいらしく、Gジャンのポケットに入っているものをいろいろ取り出してはながめている。お姉さんが、それをたしなめる。暫く玩具になって素朴な濃密な時間を楽しんだ。

私達は、これからラヤを後にして東ブータンのトレッキングへ向かう。標高450メートルのプナカから標高3,800メートルのラヤまで5日間。亜熱帯の村から鬱蒼とした森の中をゆ

き、銀嶺に抱かれた緑の高地まで様々な自然にひたりながら、素朴な人々の笑顔を喜びながらの旅であった。それぞれの地にそれぞれの生活があり、私に通ってきた道は、人々の生活路として北から南へ、南から北へ生活が往来していた。自然と人々の力強さ、そしてそのどちらにも素朴な美しさがみなぎっていた。

ラヤを後に、丘を下ってゆく。陽光がうすい雲にこされてやさしくそそいできた。姉弟の子供達は途中まで私達を見送ってくれた。桃色の小さな花が咲きみだれた緩やかな斜面に、遠ざかってゆく2人の姿。そしてその向こうにははるかな高み。

▷サクテン谷 一東ブータン一

さすがにブータン一美しい村と言われているだけありその緑の広い谷にブータン建築が点にし青い空のコントラストと共に一枚の絵のような趣がある。ゆったりとした田園の中に太くどっしりとした大樹が谷を見下ろしている。その下は格好の休憩所である。

民家の一部屋を借りて昼食を摂り、しばらくするとダルシンがはためきチョルテンの建つ峠で馬飼いのおじさん、ジルミとチュブチュウが待っていた。馬飼いのおじさんは小柄で、背筋がぴんとした人である。日本で言えばご老人の方に入る頃のお年である。けれど、馬を扱わせれば張りのある声を発し、鞭を持ち悠然とそれでいて機敏な動き、その姿は燐として風格を感じさせる。

私達は広い谷の丁度狭まっていく方向に歩を進めていくうちに、やがて樹林の中をいくよう

になる。いままでの晴れ間は高度を上げていくうちに霧となり雨となってくる。3,000メートルを越える峠にはまだシャクナゲの木があり、道にはそのクリーム色の花びらを落としている。峠で歩を休み、ジルミにアラ（ブータンの蒸留酒）をもらい口に含む。峠は霧で何も見えない。霧で輪郭を丸められたチョルテンが静かに建っている。

軽く腰を上げ荷を背負うとぬかるんだ道を滑らないように下りだした。足元に気をとられながらふと前を見ると、霧のむこうに緑の草原が広がっているのか浮かび上がってきた。私は歓喜前にいる村山にその光景をつげた。写真を歓喜の表現としてたくさんとる。サクテンの広い谷が目の前に広がってきているのである。羊が道の横で気怠い顔をこちらに向けている。わたしはその顔に挨拶しながら谷間におりていく。サクテン谷は起伏の緩やかな草原である。その中に様々な流れを気ままに描きながら川が流れている。薄く霧の流れる谷を気ままに歩きながらサクテン村に歩を進める。村の境目にチョルテンを削り貫いた建物がある。そこには雨宿りをしている馬が2頭、そのさきには荒い石でつくられたような石色の集落が建て込んでいる。おりからの雨で人の姿は見えない。私は村の入り口にあるブータン風の長屋にジルミらが荷を下ろしているのを見て、そこに向かう。

薪を集めて煮炊き用の火をその長屋の竈でおこす。霧と雨で濡れた衣服をばちばち弾ける炎にあてて暖をとる。部屋はその薪火の煙でもうもうとしている。煙にいぶされて甬の中から外を眺めると私達が通ってきた道を放牧から帰っ

てきた家族が馬を追いつながら帰ってくるのがみえる。子供だろうか、ゆっくりと歩く馬の前をいったりきたりしている。父親は馬と同じ早さで歩いている。子供と一緒にサクテンのお母さんが薪をもってきてくれた。ジルミたちは近所づきあいをいつもしてるかのように会話している。わたしたちは、べつだん気にされることもなくそのお母さんは村へ戻っていった。雨の降る中、赤い傘をさした3人の少女たちがやってきた。クスザンボーラといったがサクテンの言葉とは違うのか物珍しそうなほほ笑みを浮かべているだけで返事は帰ってこない。まあいいかとそのまま記念撮影をしようということを示し、セルフタイマーでフレームの中にはいった。そうこうしているうちに飯時となりヤクの肉をはおばった。明日はサクテンでゆっくり日を過ごしあさって出発となっていたので、蠟燭の明かりで日記を書いたり本を読んだりしていた。旅もこの地を離れると終わりに近付く。飯をつくったりテント場を探したりしながら歩を進める旅と違い、ガイドの知っているところで飯を出されるままに食うというのは初めて見る地でそれなりに興味深いものがあるのだが、いまひとつ欲求不満を感じることも確かである。一種の大名旅行のようであり、切り開いていく楽しみに欠けるのである。彼らは最大の親切をもって私達を案内してくれているのはおおいに喜ぶべきことなのだが当然制約も生まれふらっとどこかへ行ってしまうことは困る訳である。危険かもしれないが自分でぶつかる出来事を自分で処理していくなかで得られる喜びが薄くなってしまう。ブータンではまだ自由に旅をされ国が

様々な情報で混乱させられるのは迷惑であるとかんがえているところがある。確かにそうなれば様々な形でこのゆっくりと時間が流れ、豊かな心をもつ国もそうでなくなってしまうことは十分に考えられる。そうであるならば、私達はそのような身勝手なことは考えるべきではないのかもしれない。けれど、1人の個人としてこの国にふれられればもっと違う角度から見えることもたくさんあるだろう。どちらにしてもこの国の考えに今は従わなければならない。やはり、この国の未来はこの国の人が考えて選ばなければならないのだから仕方がないのである。そんなことをふと考えるとき旅人の一過性の虚しさを感じる。同時にこんなに顔がよく似て、心の分かりあえる部分の多い国でもやはり私はニッポンジンなのである。この国で生まれ育った人の時間を追い抜く事は不可能である。人間ならば誰とでも分かりあいたいという欲求はあってもとても全部は不可能であるのかもしれない。旅人の感傷を戦争に結びつけるのは飛躍かもしれないが、民族のアイデンティティーを守るために戦い、傷をつけあったりする出来事が人類の歴史の中で絶えた時代は無い。こうして考えている現在でも世界のどこかには、そのために血を流す人たちはいるのである。そして何度も教訓を得たはずの人たちもそれを全ての人類に伝えることができないでいる。単に違うからというだけではないはずである。人類の定めなのか、業の深さなのか。ヒトは自分、またその民族を守るために同じ種同志で戦い合う、それをなくすには宇宙人でも攻めてこないかぎりあり得ないことなのではないかという空想的な

思いでしか実現しそうにない。戦争を必要悪とみなし、それを経験することで人類は成長するという考え方がある。戦争でいたみながらでしか社会の考えとして理解されえないというのは余りに悲しい現実である。一方でその考えを与えるかのように人類は増えすぎることによって自ら滅亡するという考え方がある。まんざらお伽話ではない。すれば、人類はどうすれば善いのだろうか。抵抗しつつ破滅の道を辿っていくことも必要なことなのだろうか。自然の中には無駄がない。ヒトが超越的な自然の中で生きているとすればそれもまた何かの役にたつかもしれない。

次の日のサクテンは晴れ間に雲の流れるとても気持ちのいい朝になっていた。私はさっそく散歩に出かけることにした。まずは村の周りの小高い丘へ登ってみることにしよう。羊道のついた斜面を直登すると上は高原状になり遠くまでゆったりと丘がつづいていた。ひろい丘のさきちょに立ち、谷を眺めると自分たちの下ってきた峠からこの先の谷までゆっくりと左に曲がる谷が一望できる。河岸段丘のようになったところにこのサクテン村はある。小学校のグラウンドでは朝の朝礼が行なわれているようだ。生徒たちが先生のほうを向いて固まっているのが見える。ひしめき合う村の奥にはブータンのオレンジ色の国旗が掲げられた少し大きい建物もみえる。その丘を尾根ずたいに登っていくと石づくりの小屋が見えてきた。私はそういうところにはらい病患者が隔離されていることがおおいと聞いていたので遠巻きに近付き恐る恐るその背の低い建物の中を覗き込んでみた。けれど

人の姿はみられずになにかほっとして煙草を一服した。よくみるとその周りには経文旗がたてられ四角く区切りされているようである。何かの祭壇にでもなるのであろうか。また尾根を歩いていくとだんだん村の端っこにおりていく。人が見えたのでその方へ向かっておりていった。家を改築しているようで近所の人と何か話していたが私が突然丘からおりてきてクスザンボーラと声を掛けたので、何だこいつはと一瞬不可解な顔をしたがまあ挨拶はしておこうかという感じで返事をしてくれた。私の方はサクテンの人にも挨拶は通じるという事が分かり次の出会いを求めて村のなかの小道を進んでいった。ブータンの旗の立つ建物の所まできて、役所らしいその中に入ろうかなと迷っているところに、小学校低学年位の子供と幼稚園ぐらいの子供がお爺さんと一緒に近付いてきたのでさっそく挨拶をするとお爺さんは満面の笑みをもってあいさつを返してくれた。彼らはその服装からサクテンの人と分かった。赤いフェルトの厚手の布でできたチュバという前合わせに下はキュロットのカンダムを履いてる。子供達は皮で出来たチョッキのパクツァは羽織っていなかったが、後から通ってきたお父さんは完璧なサクテン服で頭にはガマシャモというヤクの毛のヘルトで出来た帽子も被っていた。私はサクテンの人とこんな早く知り合いになれると思っていたので嬉しくなって、三脚を用意して記念撮影しようと身振りで説明しながら用意した。子供たちはこの機会におもしろがって中を覗いたり、望遠鏡レンズを覗き見える見えるといっているようだった。カメラの使い方を説明して遊んで

いるうちにすぐ打ち解けた。お爺さんも、いや本当にいいものを拝ませて頂きましたわい、という感じで手をあわされてしまった。いやあそれほどでもと身振りで恐縮してその場の暇乞いをする、また村を見学に歩き始めたが子供達は一緒についてくるので今度は俺を撮ってくれとカメラを渡し、ポーズをつけにいくが、イイヨというまえに押すところを覚えた子供はシャッターを切っている。分かってはいるがおもしろいので数回ばけてみた。

しばらく細かくいくんだ小道を右に左に折れながら歩く。晴れた夏の日にこの村を歩けば石の塀でつけられた小道は沖縄の町並みのようであるかもしれない。

村の一軒の商店に辿り着く。そこで不意に買物がしたくなったので、店の中に入り店内を物色する。といってもさほど商品があるわけではない。喫茶店的な役割も果たす雑貨である。その中に竹で編んだ饅頭型の弁当箱があったのでコン・カティレモと尋ねる。その店のおっかさんはなにやら値段を言うのがよく分からない。英語で数字をいってみるがわからないという。今度はメモをとりだして数字でかいてくれというが算数用数字もだめなようである。仕方がないので適当なお金を出して足りるか足りないかという少々危なっかしい方法で値段を探ってみた。一度めのお金は足りなかったらしく、もう一枚出すと、よろしいという顔で受け取りお釣りをくれる。まあお釣をくれたから妥当な値段だったのだろうと思い、一言二言しゃべったが、お互い通じ合わない同志苦笑して店を出る。そろそろ昼飯でも食いに帰るかと宿泊所に向か

うと、さっきの店でだべっていた男が小走りに歩み寄ってきて、懐からおたまを取出し、買わないかと商談してくる。ごつい、どこにもあるような形のおたまであった。別段欲しいとも思わなかったのに、いらない、というところかと少し残念そうに戻っていった。さっきの買物ぶりを見てふっかけようとでも思ったのだろうか。それとも、日用品を買いにきたと思いい世話をしてくれようとしたのだろうか。どちらでも構わないがそのあっさり引き下がる商売の仕方に、アジアのがめつさを思うと少々拍子抜けである。それよりもおたまを持ち歩いていることの方がわたしには魅力的である。ブーツの男たるもの常に山刀とおたまを懐に携えどこでもいざという時は生活できるようにしているのだろう。あの分だとあのなんでもはいる懐には鍋もきつとあるに違いない。そしてそうした男たちの暮らしににも貨幣経済の波が少しずつ浸透してきているんだなと思わせる出来事だった。再び村を歩きだすとサクテンの男たちが耕した土地に木で編んだ棚を立てようと運んでいる。この村にはそんな棚をめぐらした畑がいくつかみられる。トウモロコシ畑の棚らしい。

彼らはこのサクテンの村よりもっと奥のメラという村にも生活している。そこは4000メートルの高原で遊牧を営んでいるらしい。そこに比べると2500メートルくらいのこの村は冬村の機能を持っているらしい。

夜になって飯を食べおわるとシゲがプジャに行こうと言い出す。わたしと村山はシゲと連れ立ってこの村の寺院に行く。そこには村人たちが

がぞくぞくと集まってき始めていた。これから始める仏事を前にざわざわしている。堂の中に靴を脱いで入ると、玄関先では蠟燭の明かりで子供達が集まってなにやらゲームをしている。本堂の中には大人たちが後ろのほうから席を埋めて、入ってきたもの同志が挨拶やら世間話をしている。本堂の正面には、壁一杯に大小様々な仏像が置かれ何十本という蠟燭が灯されその派手な色彩を浮かび上がらせている。そして仏像の正面にはラマ僧が座りその周りにお弟子さんのような若い僧侶がついている。私達は遠来からの客ということで仏像にいちばん近い席に胡坐させられた仏像の物々しいまでの深厳さと人々の村の法事的な猥雑さがいり交じって不思議な雰囲気醸しだしている。そんなときにラマが私達に語りかけてきた。わたしは日本人の知り合いがいる。日本の女性だ。その人から数珠をもらったという。私達のことをきずかってそんな話題を振り向けてきてくれたようだ。そのラマが私達の座っているそばの柱の土台石を指して、触ってご覧なさい、濡れているだろう、神が降臨してきている、と私達に告げた。たしかに土台はしっとり湿っており、他の日にはこんなことは無いそうである。半信半疑であるがその場の雰囲気からしてそんなこともあるかもしれないと思った。そうこうするうちに会席者に酒がふるまわれだした。わたしの所にも酒をつぎにやってきた。よくみれば昼間弁当箱を買った店の女の人である。むこうも顔見知りとあって大きな杯になみなみ注いではいっきに飲み乾せという。うすいアルコールならそれも可能だが、つがれる酒はラム酒である。とても

じゃないがわたしには一気に飲み乾せない。
すこし口を点けてはすぐ継ぎ足してくるので
ミシュ、ミシュ、もう十分だと断ってもなかなか
去らない。半分こずかれるようにして口をつ
けるのだがすぐ足してくる。アマ、ミシュ・ラ、
とお母さんもう十分だからといったのだが、ア
マというのが気に触ったのかより腰をすえて飲
まそうとする。しまった、ウサ（お姉さま）と
いうべきだったと後悔したがもう遅い。仕方な
く半分ぐびっと飲み乾して体の後に隠してその
場はなんとかにげおおせた。

その後読経があるわけではなく、踊りが披露
され始めた。ラヤで聞いたあの曲である。はじ
めに村の女たちが謡いだし踊りだす。高い女の
声で単調だか美しい旋律で曲は進んでいく。
やがて、男たちも交ざって掛け合いの歌が始ま
る。宴が盛り上がってきた頃、シゲが明日は早
いからもうそろそろ帰ろうと耳打ちしてきた。
もう少しこの場にいたかったがラマに挨拶をし、
後ろ髪を引かれる思いで人の間をかがめて出口
へ向かう。外では子供達が大人と違う自分たち
の世界で遊んでいる。今日は夜更かしが許され
る祭りの日なのであろう。賑やかなざわめきを
背に、霧の中をヘッドランプを頼りに宿まで帰
る。ジルミも村から帰ってきたところで一緒に
宿まで帰る。宿につくとジルミは一緒について
きた子供にペンをやっている。

宿の蠟燭で日記をつけながら、あの寺院にも
サクテンの人たちは来ていなかったが、どうし
てなのだろう。彼らは独自の文化を持つとは聞
いているがその辺りのことを調べた人はいない
ようだ。きっと彼らには彼らのブータン人とは

違う誇り高き何かを持っているに違いない。遊
牧民というのは何も残さない。文字もなければ
立派な建築物をたてるわけでもない。親は子に
民族の歴史を口承で伝え、子はまた親になった
時同じ事を子に伝える。ただいきつく先で生活
に最小限な所有を無駄なく使い、大地と共に暮
らしている。一陣の風が残す爽快さだけを残し
て彼らは生きているのかもしれない。

サクテンを去らねばならない朝がやってきた。
出発前にサクテンの村を眺めると朝の陽射しに
照らされて霧とも蒸気ともつかない煙が輝いて
いた。



▷ あ と が き

私達がブータンをトレッキングしてから、2年半もの月日が流れた。その時の事を改めて文章にする事になって、既に遠景となってけじめがつかないでいる記憶の森の中を散策していると、あれこれと様々な場面が甦ってくる。

初めに断わっておくべきだったが、このブータン旅行は、岡田と村山が個人的に行ってきたもので、所謂関大探検部の活動として行なったものではない。残念な事だったが、準備の為の時間がなく、各方面に理解を頂けなかった私達の準備不足を反省する。またもう少しOBの方々にも柔軟に対応していただければ良かったが、兎も角いずれにせよ、自分達のブータン行は多くの人達によって助けて頂き、実行する事ができた。今改めて、ご協力頂いた方にお礼を申し上げたい。

人数的な面、金銭的な面で、一度はブータンへ行く事を諦めた私達だった。落胆していたそんな時、西遊旅行の脇田道子氏からの紹介で、ブータンの元観光省マネージャーであったジグミ・ツルティム氏と面会する機会を頂き、その時ダメはもともとで「何とか二人で入国する許可を頂きたい」旨と、「もし許可して頂けるなら是非金銭的に考慮していただきたい。」旨を申し上げ、了解を得る事が出来たのであった。

道は開けた。行程についての検討と事務的なやり取り。不馴れな私達は、28代OBの永井氏に協力頂き、航空券の手配や、BTCとのやり取り等して頂いた。

また、ブータンについての知識は、西岡里子氏、国立民族学博物館の栗田教授、川崎の橘山

想会の方々などから教えを乞うた。

部内の承認だけ頂けないままであったが、5月29日、大阪空港まで見送りに来てもらった。現役部員の方々、26代OBの横山氏、29代OBの三春氏、本当に多くの人に支えられて、私達は飛び発った。重ね重ね本当に有難うございました。

ブータンでは、決して十分な期間ではなかったが、予定通りの行程を見てまわる事が出来た。ヒマラヤの自然、人々の美しさが印象に深く残っている。2年半の間に記憶が蒸留されて、美化へ熟成されている節もあるが、パロに到着した時の微風、ラヤで見たカンチュダの雄姿、緑のサクテンの谷など、その時の美しさへの感動は今でも思い出す事が出来る。そして、私達と寝食を共にした。女好きのニルミ、剽軽者のチミ、歌の得意なシゲ、温厚な物腰のチャプチュおじさん、パレーボールをしたガサの人達、怪しげな舞踏会を催してくれたラヤの人達、花輪をつくって遊んだラヤの姉弟、モンガルで出会った石田あゆみ似のお姉さん、岡田の恋したタシガンのローカルバーの看板娘、サクテン谷の人達、たくさんの人々の笑顔に出会った。

ヒマラヤの小国、ブータン。そこには、ゆたかな自然とそこに住む心温かい人々の笑顔があった。何よりもその二つが印象に強く残っている。是非もう一度尋ねてみたい。

